

アップ・オン・ザ・ルーフ

U P O N T H E R O O F

Written by 津 雅樹

SIDE A:

Saturday: or *Nowhere Man*

Wednesday: or *Rhythm of the Rain*

Monday: or *LADY BLUE*

Tuesday: or *Porpoise Song*

1
Part

アップ・オン・ザ・ルーフ

-Part 1-

津 雅樹

UP ON THE ROOF: SIDE A

by
Masaki TSU 2016

cover design and art direction

by
Matthew A. Keith
(t. m. production)

contents

土曜日、または《ひとりぼっちのあいつ》

7

水曜日、または《悲しき雨音》

29

月曜日、または《LADY BLUE》

55

火曜日、または《ポーパス・ソング》

91

・
・
・

土曜日、または《ひとりぼっちのあいつ》
Saturday: or Nowhere Man

地球軌道上・高度五〇〇キロメートルに浮かぶ国際軌道第一宇宙港。直径の異なる巨大なリング状の構造物がいくつも中心軸を同じくして連結され、それぞれのリングの各所から航宙機用の搭乗橋が突き出ている。ボーディングブリッジその形状を遠方から眺めれば、さながら宇宙空間に生息する巨大な白い巻貝を連想させた。

この宇宙港は、人類が地球軌道上に、そして月面に本格的に進出し始めてから数十年に渡る人類の軌跡を、そしてその一般化がいかに進んだかを身をもって証明する建築物であった。ここをターニング・ポイント——あるいは目的地——として、人々は各々の目指す場所へ、すなわち月面港や軌道上に点在する他のステーション施設や居住区画、あるいはさらに遠方へと、その身体を運んでゆくのだ。

ざっと四十近くあるターミナルのなかで、比較的近い軌道への航路を受け持つのが、第二八ターミナルであった。航路といつても、ここに停泊しているのは、人々がいわゆる航宙機として想像するような——たとえば地上と宇宙を結ぶ旅客機や連絡船、もしくは遠距離渡航を目的とする貨物船や探査船といった——大掛かりなものではなく、どちらかといえば地球上のバス・ターミナルに近かった。この第二八ターミナルを基点とする定期便として、航宙機のなかでは小型機に分類される定員二十名ほどのバスが、あたりの路線をそれぞれ巡回して人々を運んでいるのだ。

それらのバスに混じって、タクシー乗り場があるのも、この第二八ターミナルであった。バスの巡回コースでカヴァーしきれないポイントは多々あったし、その時間的な流動性は地上の都市部とは比べ物にならないほど悪いこともあって、タクシーはそれにあぶれた急ぎの客などを引き受けているわけである。

彼らは愛称のとおり、バスならば人々が見慣れた箱型の意匠を踏襲していたし、タクシーならば四人乗り乗用車の形状をしている。地上を走る彼らの先祖たちとの外見的差異は、ほとんどない。行き来するこのターミナルや各発着施設が人工重力圏内に建設されているため、彼らには実際にタイヤもあるのだ。差異といえば、せいぜい複雑な技術機構を覆う各社の車両デザインの違いくらいである。

ドアを開けて運転席に座れば、アクセルにブレーキペダル、シフトレバーにハンドル、それにサイドブレーキなどなど、お馴染みのモジュールにお目にかかることができる。もちろん、計器類が多少複雑化したこと、飛行機から転用した上下移動——高度——操作のギミックがハンドルに加わったこと、シートベルトが多少嚴重なものに定められていることなどの差こそあれ、それらも慣れてしまえば、どうということとはなかった。

だから、バスやタクシー型航空機をはじめて見た者は、かなりの確率でその地上然とした姿に驚くが、彼らはそもそも地上の自動車同様の機能と操作性の宇宙転用が目的として開発された航空機であり、そのコンセプトからして、いま見られる形状になるのが当然の帰結であつた。それに、彼らの普及具合の観点からも明らかのように、その開発目標は十全に達成されていたのである。

リチャード・コーエンは、その第二八ターミナルの片隅で、暇をもてあましていた。かくいう彼も小さな会社のタクシー・ドライバーであり、いまはハンドルにもたれかかるような格好で、次の客が自分の車へとやってくるのを待っているのだった。

彼は眠たげにその目を動かして、ターミナルの出入り口を見やった。いまは昼のラッシュが過ぎたところで、日に何回か訪れる「空白時間」なのだ。ターミナル内の人影はまばらで、バスやタクシーの停車数も少ないために閑散とした雰囲気をかもししている。宇宙港全体の意

匠——天井も床も壁も、幾種類もの白で幾何学的に構成された、清潔で、なにもかもがほかに明るい無影の禁欲的な空間——は、その雰囲気をさらに強調する。

そんな白光の世界を実に〈キューブリック的〉だと、リチャードは常々感じた。壁にときおり現われるビビッド・カラーのコマーシャル・アートとのコントラストも、そういえるかもしれない。キューブリックが映画『2001年宇宙の旅』を撮ったのは二十世紀半ばだが、人間の感性というものが百余年経つても変化しないものなのか、それとも舞台となった二〇〇一年から折り返して、ようやくそこまで追い付いたのかは、リチャードには定かではなかった。同時に、多種多様な人種・国籍の人々を内包せねばならない空間として、この明るい余白のようなデザインは、ある意味で最良のものなのかもしれないと考えもした。

そんな清廉で淡白な空間において、リチャードの乗るタクシーは、独特の存在感があった。ある種、時代錯誤で雑多な感じのする懐古的なその意匠——まさに黄色いイエロー・キャブタクシーなのだ——は、まわりの風景からぼつんとそれだけ抜け出しているような印象を与えた。レトロな車の意匠は社長ボスの趣味であり、同時に社のコンセプトだったが、この職についてもう五年ばかりたつリチャードも、この意匠による集客効果があるのかどうかは、なんともいい難かった。しかし、かといってそれだけの時間をこの車で過ごしていれば慣れもするし、愛着もわくというものだ。それに、商売上がったりというわけでもない。だからこれに関しては、彼が

なんら不満をもらすところではなかった。

あふ、とりチャードの口から小さな欠伸^{あくび}がもれたとき、ひとりの客が通路をターミナルへやってくるのが目に入った。その黒髪は短く切られていたが、どうやら若い女性のようにだった。すこし暗めのブルー・ジーンズに淡い配色のジャケットというカジュアルな服装で、大きめのシオルダ・バッグをひとつ肩から提げている。そのバッグとほっそりとした体型のギャップが、より彼女を華奢に見せていた。

彼女はしばらくターミナル内を見まわし、そして壁に表示される時刻表を眺めていたが、おそらく適当な便がなかったのだろう、またターミナル内をキョロキョロと見まわした。リチャードはその様子をなんとはなしに眺めていたが、やがて彼女がこちらを見つけ、ややあつて歩いてきたので、リチャードはハンドルから身を起こし、着ているジャケットの襟を直した。

がちやり、と後部座席のドアが開く音がした。

「ちよつと遠いのだけれど、いいですか？」彼女が、頭だけを車内に入れて、リチャードに尋ねた。繊細だが、しっかりと落ち着いた声だった。

「もちろん」リチャードが振り向いて答える。「どうぞ、お乗りください」

どうも、と彼女は言つて、いったん身体を車外に出してから、シオルダ・バッグとともに

車内に乗り込んだ。

「どちらまで参りましょう？」

リチャードが尋ねると、彼女はすつと彼のほうを見すえて答えた。

「どこでもない、どこかへ」

唐突な彼女の言葉にリチャードは戸惑ったが、咄嗟にそれはジョークなのだと思い至った。

「ここではない……ではなくて？」

リチャードがそう応えようと、彼女はその目を細めて微笑んだ。彼もそれに応える。

「ごめんなさい、本当は……」彼女はシオルダ・バッグのポケットから一枚のメモ用紙を取り出した。「ここまで、お願いできますか」

そのメモを受け取って、リチャードはその座標をたしかめる。アドレス流麗な筆致で書かれた行き先はなるほど、たしかにすこし遠かった。

「ええ、結構ですよ」ナビ・システムに座標を打ち込みつつ答える。「二時間ばかりで着くでしょう」

リチャードはそのメモを彼女に返すと、運転席に座り直し、シートベルトをまわした。

「あのお客さん、シートベルトをしてください。このターミナルを出ると、車内がほぼ無重力になりますから」

彼女が頷いて、シートベルトを締めたのを確認すると、リチャードはドアをロックして、料金メーターをオンにした。

○

バックミラーに映る宇宙港のエアロック開口部が小さくなるのを眺めながら、リチャードは乗客の様子を窺^{うかが}った。いま彼女は、背もたれにゆるりと身体をあずけ、地球とは反対方向——拡がる宇宙空間——を、こともなげに眺めていた。小鼻だちのその顔から、その声音よりもすこしばかり幼い印象も受ける。

ふと、彼女は思い出したようにシオルダ・バッグを開き、なにやら探し物をしていたが、やがて「しまった」と小さく呟いた。そして、諦めたようにバッグの口を閉じると、気だるげにため息をついた。

「あの、どうかしましたか？」リチャードは思わず尋ねた。

「え……？」彼女は、リチャードに突然声をかけられて驚いたふうに見えた。「電話をかけようと思ったんですが、その……」

彼女はそこまで言いかけて口よどみ、ミラー越しのリチャードから目をそらした。リチャー

ドが黙って待つっていると、彼女はおずおずと続けた。

「運転手さん、携帯電話を貸していただけませんか？」

「は？」

リチャードは、思いがけない言葉に返答に窮した。ほとんどの人類が、形はどうあれ携帯式の通信モバイルを持ち運び始めてから直に半世紀以上が経とうとしているのに、それを持たない人物が目の前に現れようとは思ってもよらなかった。

「すみません、ぶしつけとは思いますが……」

「あ、いえ、構いませんが……」リチャードはそう応えつつ、ジャケットの胸ポケットにしまった自分の携帯電話を取り出すと、アクセス・コードを解除して後ろ手に彼女に差し出した。「どうぞ」

彼女は礼を言ってそれを受け取ると、タッチスクリーンを器用に操作して検索を始めた。まもなく目当ての番号が見つかったようで、ナンバーを入力し、機械を耳に当てた。やがて相手に繋がったとみえて、彼女は電話口に向かって静かな声で話し始めた。

「もしもし……ええ、タカナです。はい、……もうじきに、二時間くらいでそちらに着くと思います」

リチャードの耳に、なんととはなしに聞こえてくる会話から察するに、いま自分たちがタク

シーで向かってゐる先らしい。

「はい……はい、いえ、こちらこそ……では後ほど……」

彼女はそう言つて通話を切ると、小さくため息をついた。

「これ、ありがとうございます」そう言いつつ、彼女は携帯電話をリチャードのほうに差し出す。

「いえ、どういたしまして」

リチャードは、前を見たまま右手でそれを受け取ると、もとあつた内ポケットに携帯電話をしまった。

「お客さんは、宇宙ははじめてですか？」

「ええ」彼女は頷いた。

「ご旅行ですか？」

「いいえ」今度は小さく首を横に振った。「引越しです」

「引越し？」

「そう、引越し」バックミラー越しに、彼女がふっと笑うのが見えた。「そんなに不思議ですか？」

「ええ。こちらにはじめて出てきて、そのまま暮らすというのは、あまり聞かないし、なに

より引越しにしては荷物が少なく思ったのですから」

たしかに、彼女が提示した行き先というのは〈アパートメント／マークⅡ・コロツサス〉という居住船で、さきほどの質問は愚問といえましょう。このアパートがあるのは、宙域でいえばかなり高軌道の辺境で、おそらくそのアパートのほかにはなにも浮かんでいないような場所だ。いつの世にも「世捨て人」的な思考／嗜好の者はいる。そういった人々を迎えるために、マークⅡのような田舎の居住船^{アパート}もまた、少なからず存在するのだ。リチャードもそれは知っていたし、何度か——今回のとは別のところだったが——タクシーをまわしたこともあった。

しかし、彼女はまだ二十代前半と見えて若いし、そんな僻地——地上の田舎とはわけが違う——に引つ込むような雰囲気、リチャードには微塵も感じられなかったのだ。

「だからてつきり、誰かに会いに行くものだとばかり」

「そうですね、たしかに」彼女は自分のシオルダ・バッグを見やった。「身軽になろうと思つて、なるべく少なくなりました。案外少ないのですよ、必要なものなんて。いくらかの服とラップ・トップ、それにCirodに入れた音楽で十分……でも、携帯電話までポイツと捨てたのは失敗でした」

リチャードはその言葉に、疑問符がすこしばかり浮かんだが、彼女は表情だけで笑った。

「じゃあ、そのマークⅡへ？」

「ええ、入居します」

「なるほど」リチャードは、頷きながら次の質問を探した。彼は積極的に乗客とお喋りをする性格ではなかったが、これまでの彼女の言葉のそこかしこに頭れる感覚に、すこし興味を持ったのだ。「お仕事は、なにをなさってるんです？」

「うーん、なにに見えます？」

逆に聞き返されてしまった。携帯電話を捨て、そんな辺鄙なところに越すわりには、案外に人懐っこい性格なのかもしれないと、リチャードは思った。

「はあ……」リチャードは片手を顎にやり、数秒間考えた。「もしかして、新進気鋭の作家さんかな」

「え？」彼女は、その回答に意表を突かれたようだった。「なぜですか？」

「ジョークがお好きなようだし……」

「それって、皮肉？」彼女がつい、と片方の眉を持ち上げて笑みを浮かべる。

「いいえ、ただ私の第一印象です。悪い意味ではなくね」これについては、正直な感想だった。「それに実のところ、ウチのタクシーを使う女性——とくに若い方っていうのは、めったにいませんから。ホラ、当世風の感じじゃないでしょう。ほかにもタクシーがいたから、そち

らに乗られるものとばかり思っていました」

「なんというか……」彼女はくるりと視線を泳がせた。「宇宙港に着いて驚きました。どっちを向いても白、白、真っ白で、びっくりするほど明るくて……。でも、なんだかそういうのって、わたしは落ち着かないんですね。全部同じように見えてしまって、ずいぶん港内を迷いました。一時間くらいウロウロしてたんじゃないかしら。やっと目当てのターミナルに着いたと思ってまわりを見たら、どこもかしこも同じようなタクシーやバスばかりでもうンザリ。そうしたら、このタクシーが目に入ったんです」

「浮いていたでしょう」

「失礼な言い方をすれば、ええ、たしかに」

リチャードは思わずこし吹き出してしまう。それにつられるように、彼女もくすりと笑い声をもらした。

「でも、わたしはこちらのほうが、なんとなく好き」

「嬉しいなあ」リチャードは笑った。「それで結局、お仕事はなにをしておられるんです？ やはり作家さん？」

「残念ながら、答えはノウです。本当にそうなら、わたしも嬉しいですけど。小説が大好きですか？」

「ええ、まあ。とくに、教養がなくても読めるものはね。そうだな、ことにSF小説かなあ。あなたは？」

「わたしも小説は大好きですよ。SFはあまり読まないけれど、そう、幻想文学とか、あるいは海外が舞台のものが好みかしら」

「指輪を捨てたり、それとも諜報活動したり……」

「そうそう。気楽に読めて、いろんなところに行った気分にしてくれるような小説」

「……でも、あのジョーク——どこでもない、どこか——っていうのは、私としては好きですよ」

「ほんとに？　ありがとう」彼女は微笑んだ。「正解は——そう、コンピュータ関係」

「じゃ、プログラマーかなにか？」

「ありていに言えばそうです」彼女はそう言うのと、もう一度視線を窓の外——宙空へと移した。「幸い、どこにいても仕事はできますから」

最後のほうは、まるでため息をつくかのような声音だった。表情も、いままでの笑顔が消え、どこか翳りが差したようにリチャードには思えた。そしてか細く、彼女はこう口にした。「そのジョーク——でも、半分はわたしの本音……」彼女がまぶたを重たそうに閉じる。「浮世に、疲れちゃった」

彼女は永く弱々しいため息をついた。そして、すっかり気落ちした表情で、彼女は車窓の向こうに視線を移した。どっちつかずな静寂が車内を満たした。

なにか声をかけるべきかと思ったとき、タクシーのナビ・システムが短いシグナルを鳴らした。航路線の分岐点にやってきたのだ。ミラー越しに彼女をすこしだけ見やり、リチャードはひとまずウインカーを出し、そしてハンドルをきった。

しばらくの静寂が車内を覆ったあと、ふと彼女がリチャードに話しかけた。

「意外に移動感がないものですね、乗っていても」

「というと？」

「その、向こうのほうの星空を見ていても、ときどき宇宙船や建物ステーションが通り過ぎるくらいで、全然なにも動かないから……。」

「それは、宇宙がとんでもなく広いからですよ。向こうのほうで光っている星は、本当に相당한距離の隔たりがあるんです。だから、景色として流れていかない。映画なんかでは、平気で後ろへ行ってしまいますけれどね。」

「そうだ——地上で、水平線を見るとき、水平線はどのくらい向こうにあると思います？」

「水平線ですか？ うーん、二十キロくらい？」

「残念。たしかに、果てしなく遠いように思える青い水平線も、実は案外近くにあるんです。」

もちろん、観察する高度によって異なりますが、たとえば仮に海岸から向こうの海を眺めたとすれば、そのとき見える水平線は五キロほど先のところにあるものです。なぜなら、地球は球体であり、面としては湾曲しているからなんです。いま私たちが浮かんでいる宙空も、せいぜいが地上から七〇〇キロメートルそこらしかない。だから、案外人間の世界観なんて、狭いものです」

「ずいぶん遠くに来られたと思ったんだけどな」

彼女はおどけるように、しかし、か弱く口元だけを笑顔に歪めた。まるで彼女自身のために無理をして笑おうとしているようにすら見える表情だった。そして、彼女は車窓へと視線を戻した。

「メモリも消して、携帯電話も捨てて、身軽になって、遠いところに……」

「どこでもないどこか」に……？」

「……ええ。でも、本当のところは自分でもよくわかりません」彼女はゆっくり首を横に振り、肩をすくめた。「歌の文句じゃないけれど、屋根の上にはとっておきの場所があつて、そこなら、なにか変わるんじゃないか、なにかきつと違ってくれるんじゃないか——と、勝手に思っていました。わたしのことなんか誰も知らない、どこか遠くへ行つて、わずらわしいことは全部忘れて、ひとりになりたいなつて……。でもなんだか、わからなくなっちゃった」

彼女は、そう言いながら自嘲的な笑みをもらした。

「ごめんなさい、こんな愚痴。忘れてください」

その姿をミラー越しに眺めるうちに、リチャードは、なんともいえぬ気持ちになった。ミラーに映った彼女に、どこか自分自身が感じられたのだ。おせっかいかもしいとは思いつつ、なにかしらの言葉を投げかけなければという気がした。

「私も——」リチャードは、ゆつくりと言葉を選んだ。「実は、携帯電話というのが嫌いなんです。ただただ必要に迫られて持っているだけですね。あんな窮屈な機械はほかにありません」
「本当に？ 意外だな」

「なんだか鎖に繋がれているようで落ち着かない。だから、普段もあまり使わないんです。きつと、発着信の履歴をご覧になれば、あまりの少なさに驚かれるでしょう」

「不思議……変わってますね」彼女の表情に、どこか安堵したかのような薄い微笑が浮かんだ。「ええ、自分でもそう思います」リチャードは頷いた。「私も、あなたみたいにわからないことだらけでした。いや、むしろ年々増えているような気がしますよ。でも、これは私がただただぼんやりと生きてきたことの報いでしょう。ふとした拍子に昔やらかした、しようもない失敗を思い出しては落ち込むし、これからのことを考えて無性に恐ろしくもなる。おかしいものです。ただ、なんにせよ、焦って考えるようなことではない。時間をかけてもいいこ

とがあると、私はそう思いたいなあ——私はちよつと時間をかけ過ぎたのかもしれませんがね。それに、私はあなたがうらやましいと思う」

「どうして？」

「だって、あなたはいま、こうして決断したことを実行しているじゃありませんか。まんじりともせず、ただ漠然とハンドルを握ってアクセルを踏んでいる私とはわけが違ふ。それが、うらやましいのです」

その後、彼女はミラーから目を離し、長いあいだ口を開こうとはしなかった。彼女は、彼方に広がる宙空を眺め、そして、それとは反対側の窓へとその視線を向けた。太陽光線を受けて青く反射する地球が、そちらには広がっている。彼女が、それぞれの虚空のなかにいたいなに見ていたのか、リチャードには知る由もなかった。

○

しばらく経って、彼女の目的地であるアパートが視界に見えてきた。小規模だが、回転によって人工重力を得る典型的な宙空居住船だった。質素な佇まいというのか、その飾り気のない意匠は、まるでタイヤのホイールのように見えた。

リチャードは車内の無線を用いて、マークⅡに対しエアロックへの進入許可を求めた。ほどなく進入許可が伝えられ、タクシーは滑るようにして、そのホイールの中心部分にあるエアロックへ吸い込まれていった。

「ありがとう、運転手さん」支払いを終え、彼女はそうリチャードに告げた。「きょうは本当に」「いえ」リチャードは笑った。「それじゃあ、気をつけて」

「運転手さんも」

そう言つて、彼女がタクシーを降りかけたとき、リチャードは「そうだ」と、慌てて彼女を呼び止めた。

「これを」彼は彼女に名刺を一枚、差し出した。「タクシーをご用命の際は、いつでも電話してください。喜んで、お迎えに上がりますよ」

彼女はそれをそつと受け取り、それからもう一度「ありがとう」と言った。

「わたし、タカナといいます。タカナ・グリナウェイ」

「私はコーエン。リチャード・コーエン」彼は短くそう名乗ると、右手を上げた。「それじゃあ、これで」

彼女は頷いて、バッグを肩にかけ直し、エアロックの出口へと向かった。

リチャードは、彼女がエアロックから回避したのを確認して、ドアを閉じ、ベルトを締め

直して、そして無線を取った。

「マークⅡへ。乗客の退避を確認。これより離脱に移る。減圧処理、ならびにエアロックの開口を求む」

「了解」やや間があつて、返答が入る。「これより開始する。ご苦労様」

鈍く、重い音を立ててエアロックの扉が開いてゆくのを眺めながら、リチャードはふとあることを思い出していた。かつて観た古いアニメーション映画に出てくるキャラクターのこ
とだった。どこかあけない瞳をしたその不思議なキャラクター——たしかジェレミーとい
う名前だ——は、誰も、そしてなにも存在しない世界にひとり気楽に暮らしていた。が、や
がてそれが究極の孤独だったことに気づいた彼は、ひとり涙を流す。彼女——タカナを見て
いて、ふと脳裏に浮かんだのだ。

エアロックが完全に開ききり、リチャードはアクセルを踏んだ。

ゆっくりと彼のタクシーが宙空へと滑り出る。新たな客の情報はまだ送られてきてい
なかったのだ、とりあえず国際軌道第一宇宙港へと戻ることにした。

映画のなかで、その後ジェレミーは、黄色い潜水艦に乗ってやってきた四人の青年たちに
よって救われる。静かな絶望を胸に、孤独を求めて宇宙まで彷徨い出た彼女に、そんな救い
手は現れてくれるだろうか。

現れてやってほしいと、リチャードは思った。なにかに絶望するには、彼女はまだ若すぎる。しかし——と、リチャードはこうも思った。そんな救い手を求めているのは、もしくは彼自身ではなかったか……。

思いがけず浮かんたそんな考えを振り払おうと、リチャードはかぶりを振ってアクセルを踏みしめた。タクシーが音もなく加速してゆく。後ろに見えていたマークⅡの姿は小さくなり、やがて見えなくなった。

水曜日、または《悲しき雨音》
Wednesday: or *Rhythm of the Rain*

リチャード・コーエンがダッシュボードの燃料メーターに目をやり、燃料補給スタンドへ寄ることを決めたのは、その日の彼の就業時間^フが間もなく終わりという頃合い——午後六時近くであった。本当ならば、もうすこし時間に余裕をもつて寄っていたらうが、その日、彼のタクシーの客足が意外なほど多く、てんでこ舞いだったのである。

つい先ほども最後の客を軌道上ビジネス・ステーションA・三〇二まで送り届けたばかりであった。その客というのが、とにかく早口かつ横柄にものをまくしたてる成金風の人物だったので、その応対をしていたリチャードは思わずポケットから煙草の紙箱を取り出して、その口に押し込んでやりたくなった。

宇宙空間という特殊な路線環境ゆえに途中下車を願えないのが、地上の同業者にはないこ

ち、独自の難点だと、リチャードは——宇宙タクシーしか経験がなかったが——思うのであった。働き甲斐があるといえばそうだったが、最後の最後でいささかくたびれたというのも実感のリチャードである。

彼のきょうの楽しみといえば、仕事終りに大好きな映画を観に出かけることだったが、予定が後ろにズレ込んだことで、思い描いた上映回の席につけるかどうか少々怪しくなった。そうなった場合、代打で観る映画があったらどうかと、リチャードはちよつとばかり夢想した。いくつかの候補を脳内にピックアップすると、沈みがちだった気分も幾分元気になった。眠たげな目を片手で擦りながら、頭のなかであるていど鑑賞作品の目星をつけたところで、リチャードは会社に帰投の遅れを告げるために無線を手にとった。

「こちらSC・八五六、SC・八五六。本部へ」

すこしの間^まがあつて、短いノイズとともに返答があつた。

「こちら本部、こちら本部。リチャードさんですね、どうぞ」

「あれ？」リチャードは一瞬戸惑った。普段無線では聞かない声だったからだ。「その声はリナかい？」

リチャードが尋ねると、無線機の向こうから、涼しげな声音の返答がきた。

「そうです」

リナ・バーキンは前の秋に入社した、若いが腕の立つ技術師^{メカニック}だった。彼女の入社と前後して定年退職を迎えたテツヤ・ヤマシタ御大を補って余り得ると、かつてのナンバー・ツードあり、押し出し式に社の整備班全四名を統べることとなったドルフ・ライゼンも太鼓判を押した。彼が戦々恐々と「なかなか趣味の世界を知っているお嬢ちゃんだ。というか、俺なんかよりもよっぽどスゴイ」とさえ言っていたのをリチャードは知っている。

リチャードも彼女がその腕を振るう場面に何度か遭遇したことがあった。腐っても精密機械の塊たる航空機の一つであるタクシーは、しかもそのボディが小型であるがゆえに、他の公共乗用船よりも複雑で緻密な機構を持っていた。熟練の技術師でさえ、むつかしい入り組んだ代物なのである。反対に、動かすだけなら誰でもできるのが世の常であり、リチャードやほかの運転手たちも、自分の乗っている機械の仕組みを三割も理解していないだろう。

しかし、リナはそれに臆するところを知らなかった。首筋まで伸びた短めの黒髪を後ろで結^ゆわえた彼女は、社の濃紺のツナギに袖をとおすと、その細い腕でエンジン・ルームを巧みに探索し、あるいは華奢な体軀を車体の下に滑り込ませて作業をこなした。そうして彼女はいつもの確やかかつ精緻に車両を整備し、修理を完了するのだった。そんな彼女の理知的な風貌と静かで無駄のない所作にリチャードは思いを馳せた。彼女の技術に、いくら世話になったかわからない。それほどの才覚を持ち合わせた人物が、なにゆえこんな小さな会社に通

着いたのであろうか。常々疑問に思うリチャードである。

「ナターリアは？」リチャードは無線越しに本来そこにいるはずの人物の所在について尋ねた。社内で最古参の熟練社員であるナターリア・スコルプコは、きょうはまだ勤務時間内のはずであった。

「いま、お手洗いに。そのあいだの代理です」

「そうか、なるほど」なにせ小規模な会社である。あまりスタッフの数も多くないから、ときたま、このようなことも起こるのであった。「ええと、それで……」ともかくも、交信の本来の要件を伝えねばならない。「帰投前に、スタンドに寄るから帰投時間が少々ずれ込むと思う」

「了解」リナが歯切れよく応えた。「そちらの近くにお客さんいませんから、そのまま向かってくださってかまいません」

「了解」

「それから……」スピーカーの向こうで、メモ用紙を取る音がした。「帰投後に、社長室へ出向くように——とのメモがあります」

「ほんとに？」なにかやっただろうか、と一瞬思うが、とくに心当たりはない。多分、雑務かなにかについてだろう。「いま、そっちに社長はいるのかい？」

「いえ、出かけてらっしゃいます。多分じきに戻られると思います」

「わかった」

「あ、それとリチャードさん……」

そこまで言って、リナの声が滞った。彼女にしては珍しいことである。しばらく、無線の静かなノイズが流れるままになった。

「……リナ、どうした？」

「あ、いえ。なんでもありません」

「そう？」

「はい、すみません」

「うん、じゃあ通信終わり」

リチャードはそう告げて、無線を戻した。

リナが結局なにを言おうとしたのか判らなかつたが、きっと彼女の言葉どおりなんでもないのでろう。あるいは、なにか自分に用事があつたのかもしれない。そうだとしたら、それはなんだろうかと考えてみたが、リチャードに思い当たる節ふしはなかつた。まあ、会社に戻ってから尋ねてみればいいだろう。

リチャードはウィンカーを出して、国際軌道第一宇宙港への航路に車を進めた。

○

燃料補給のためのスタンドというのは、軌道上のキー・ポイントにもなる比較的大きなステーションに各々ひとつかふたつずつ設置されているものだ。だが、国際軌道第一宇宙港のそれは、また別格であった。

国際軌道第一宇宙港の数多のリングの連なりのひとつに、その一輪がまるまる燃料補給スタンドという、まさに「スタンド区画^{リング}」とでもいうべき区画がある。長距離航路をもつ大型または中型の航宙機——機の搭乗橋に補給ポンプが設置されている地球や月面を行き来する旅客機や貨物船——を別として、小型航宙機に分類されるバスやタクシー、あるいは現在のところまだ少数しかない個人航宙機^{プライベート}などのための燃料補給スタンドが、このリングに一括でまとめられているのだ。

そのリング内部には、こちらから向こうまで——実際には、そのすぐ後ろまで、だが——世界各地の様々な会社の経営する燃料補給スタンドがずらりと、まるで見世物市のように連立している。白い幾何学で構成されたリング内部に、その色鮮やかなネオン・サインや液晶広告、ビルディングの彩色が連なるその光景は、教会を彩るモザイク画のようでもあり、ピ

エット・モンドリアンのソリッドな抽象主義絵画を想起させるようでもあった。まさに『ブロードウェイ・ブギ・ウギ』である。そして、そのスタンド群のそここへと燃料補給を求めてヤマと小型航空機が往来するのだ。

リチャードは、スタンド・リングのエアロックを抜け、そのスタンド街道へとタクシーを転がした。いくつかのスタンドを後ろに見送りながら、目当てのスタンドに向けて車を走らせると、ほどなくして見慣れたスペイシィ社のスタンドが目に入る。〈SPACEY〉という白い綴りの後ろに、数種の青いペイントで、ほのかな揺らぎが描かれているのが特徴の看板である。バス会社やタクシー会社などが利用する際には、前もって契約を結んでおいたスタンドを利用するのが常であった。

運のいいことに、六台分ある〈スペイシィ〉の補給スペースに一台も車は見当たらなかった。ちやうどその空白時間に来られたらしい——順番を待つことなく、すんなりと補給スペースに入ることができそうだ。

リチャードがそちらのほうに車を向けると、威勢のいい挨拶とともに、従業員がやってきた。二本の腕を手前に振り上げながらリチャードのタクシーを誘導する。見ると、リチャードのよく知った従業員で、名前をニコライといった。彼の両腕がこちらに伸ばされ、停車を指示する。その指示に従って、リチャードはブレーキを踏んで車を停車させ、そしてエンジ

ンを切った。

「いらっしやい」従業員が運転席側のドアを開けつつ言った。「いかかですか、調子は」

「ええと」ニコライの元気に若干圧倒されながら、リチャードは頷いた。「まあまあだね」

「満タンで？」

「うん、満タンで」タンクの蓋を開けるレバーを引きながら、リチャードは言った。「領収書もいつもどおり頼むよ」

「わかりました」

ニコライは、社章の編み込まれた青色の帽子のつばを片手でつまみつつ頷いた。そうしていつものやりとりを終えると、彼は給水ノズルのもとへと駆けていった。

スベイシイ社をはじめ、これら燃料補給スタンドで取り扱われる、あるいは需要される燃料のほとんどは、実は「水」——蒸留水である。タンクに満たされた水を電気分解することによって、水素と酸素を得、そしてその水素ガスを内燃機関へと送り、機の推進力を得るのである。さらに酸素は機内の酸素ボンベへと貯えられ、乗組員たちの肺を満たす——大雑把にいえば、このような仕組みというわけだ。二十世紀後半から研究が進められていた水素燃料エンジンも、本格的な宇宙時代の到来によって実用化に至った技術のひとつであった。

給水ノズルがタクシーに差し込まれる音を聞きながら、リチャードは運転席の外へ出た。

手洗いを借りようと思ったからだ。そのことをニコライにひと言告げて、リチャードはスタンドの建物へと歩いていった。

中央のガラス戸を押して、建物のなかに入る。

そこは、給水や点検などをする際の待合室として利用されているスペースで、入り口側のガラス張りの壁際には酒場のカウンター席のようなテーブルと椅子が配されている。部屋中央には、二メートルほどの観賞用樹木が鉢に植えられ、右手奥には飲み物の自動販売機も設置されていて、憩いの空間を演出している。待合室の左手の半分から向こう側は、これまでガラス張りの壁をはさんでスタンドの事務室が据えられているので、この待合室自体はLの字を横倒しにしたような形である。いま待合室は、客の姿もなく無人であった。ほかの従業員は事務室に引っ込んでいてるのが、ガラス張りの壁越しに見てとれた。

リチャードは、待合室の右手奥へと進んだ。待合室の右奥の非常に目立たない位置——自動販売機のすぐそばから続く通路があつて、トイレはそれを通つて店のさらに奥に行つたところにあるのだ。

リチャードはその通路に出る。外や待合室とはうって変わり、無菌室的な白い通路である。通路は静かで、自分の足音がよく響いた。そこを数歩歩いて、男性用トイレへと足を進めた。便器の前に立つて用を足す。スタンドのほうでは新たに客が来たらしい。事務室から従業

員が出てゆく音と、客を迎える声がかすかに聞こえ、そしてまた静かになった。

ぼんやりと目の前の白い壁を眺める。長く、細いため息を静かに吐き出しながら、ふと、今朝に見た夢がリチャードの脳裏によみがえってきた。

その夢のなかで、リチャードは大学生だった。見渡せば、懐かしい構内や大学時代の友人たちの顔が記憶のままに再現され、リチャードはそのまま当時の感覚へと引き込まれていた。その日の講義も終わり、これからどこかに夕食を食べに行こうと、男友だち数人と話しているところだった。しかし、そのなかにひとりだけ異質な人物がいたのだ。

それは、リチャードがハイスクール時代にクラスメイトだった少女だった。大学の友人たちに混じって、そこに佇んでいたのだ。文武両断、真っ直ぐに流れるブロンズがよく映える端正な顔立ち、クラスのなかでも中心的な人物ながら人懐っこく気さくな性格だった彼女——それは、リチャードがはじめて恋を経験した相手であった。

その彼女がなぜ、いまここにいるのだろうか。それも、かつての思い出の姿のままに……。リチャードがそんな疑問を頭に浮かべていると、友人たちはどこの店で夕食にありつくかの結論を出したらしい。誰が言い出したが早い、皆はその店に向かって一斉に駆け出した。彼女も、彼らについて駆け出す。リチャードも慌てて後ろに続くが、前をゆく彼らに——彼女に一向に追いつけないのである。夕闇に吸われるような風景のなか、彼女のスカートから

のぞく白い脚がいつまでも、いつまでもリチャードの一步向こうを駆けてゆく——そこで、リチャードは夢から覚めたのであった。

ベッドから身体を起こし、それが夢だったと認識すると、なんともいえぬ気分のリチャードは覆われた。彼女とは友人としてそれなりに仲よくはなつたけれど、彼女に自分の想いを伝えることは、リチャードは最後までできなかった。むしろ、積極的にそうしようと思えなかったのだ。結局、彼女は別の大学へと進学していき、その後の経緯などリチャードは知る由もなかった。彼女もまた、思い出のなかの人物のひとりとなるのにまかせてしまったのだ。た。

リチャードはズボンのジッパーを戻し、洗面台へと向かった。要らぬことをまた思い出してしまった——蛇口をひねり、手を水道水にさらしながら彼は嘆息した。鏡に映った自分に、大げさに眉を吊り上げてみせる。三十過ぎにもなつて、いまだにこんな夢を見てしまうなんて、まったくどうかしている。そういうば、彼女はいま達者に暮らしているのだろうか……。

そんなもやもやとしたセン、チな気分から彼を現実へと呼び戻したのは、突然の激しい音だった。彼が水道の蛇口を戻したとき、待合室のほうから、なにかが床に転がる音や、従業員の悲鳴が聞こえてきたのである。尋常の雰囲気ではない。

なにごとかと思ひ、リチャードは静かにトイレから通路を戻る。そして、そつと壁に身を隠しながら、彼は待合室のほうを窺った。

その瞬間、リチャードは自分の眼を疑った。そこでは、自分がまさか出会うはずもなかうと思つていた光景が繰り広げられていたからだ。

四人の従業員たちが一斉に会し、緊張した面持ちで待合室の中央を取り囲んでいる。彼らはみな押し黙り、そのまま彫刻のように固まつていた。

それぞれの視線の先に目をやると、派手なバンダナで口元を覆った黒い革ジャン姿の屈強な男がひとり、その大きく見開かれた眼球をぎらつかせていたのだ。その男は、左腕でトラックの運転手らしき若者——先ほどやってきた客だろう——の首筋をひつつかみ、大柄なダガー・ナイフをその体に押し付けている。いまにも若者を刺し殺さんばかりだ。突然の出来事に、その若者の表情は恐怖に固まつていた。

「動くな！ 動くなよ」革ジャンの男はやにわに叫んだ。「おとなしく俺に従え！ さもなきや、こいつの命はないからな」

その言葉に、一瞬びくりとした空気が待合室に流れる。革ジャンの男は、どうやら強盗らしかった。

「そこのお前、お前だ」強盗の声が待合室に響かせながら、ナイフの切っ先をニコライに向

けた。「お前、レジに行つて、このスタンドの有り金を全部持つて来い。いいな」

「こゝこゝにはレジはないんだ」ニコライは、緊張と恐怖のためにところどころどもりながら答えた。「か、金は事務室にある」

ニコライが、ガラス張りの壁越しに見える事務室のなかを首で示すと、強盗は苛立ちながら怒鳴った。

「なんでもいい、さつさと持つて来い！」

「わかった、わかった」ニコライは腕で「落ち着け、落ち着け」とジェスチャーをしながら、ゆっくりと強盗を刺激しないように事務室のドアへ向かつて後退あとじさした。

強盗は、ほかの従業員たちを睨みつけて「お前らは動くんじゃないぞ！」と声を荒げている。

リチャードは、顔を引つ込めて、壁に背をもたれた。

幸い自分はまだ見つからないものの、状況はあまり芳かんばしくない。遅かれ早かれ見つ

かつてしまうだろう。だからといって、強盗の男はかなりの興奮状態だから、いま自分があ

の場に踏み込んで行くのも得策ではない。なにより自分も出てゆきたくは——願わくば——

ない。よしんば踏み込んだとしても、痩せっぽちの自分では体格からして強盗にかなわないし、そもそも自分はアクション映画の主人公ではない。いくら香港のカンフー映画を観ているからといって、生まれてこのかた殴り合いの喧嘩などしたこともないのだ。むしろ、した

いとも思わない。そもそも運動すら嫌いである。

かといって従業員たちも、ナイフ片手に人質を取られているせいで、強盗との距離を詰められないのだ。下手に動けば、不運なトラック運転手の生命も危険になる。いま強盗に言われるがままに事務室に入ったニコライの動きも、ガラス張りの壁から丸見えで、警報装置を鳴らしたり、ましてや警察に通報するなどもつてのほかだった。まさに、こう着状態であった。

なんとかならないものか——リチャードは、あたりを見まわした。とはいったものの、ここは細く白いだけの通路である。なにか打開策に使えるようなものなどありそうもない。警察に通報できれば一番いいが、しかし、ここで携帯電話を使用すれば、あの革ジャンの強盗に自分の所在も発見されるだろう。そうすれば、事態をさらに悪化させることになりかねない。しかし、このままこうしていても、事態は一向に好転しないのもまた事実である。これでは八方ふさがりもいいとこだ、なにかないか、なにか……そう思っ、リチャードがふと天井を見上げたときであった。

通路の天井の、ちょうどリチャードのいる真上あたりであった。白い天井のタイルとタイルのあいだに、はかなげに光る小さな赤い点が見えた。

火災報知機のランプである。

しめた、使えるかもしれない。リチャードは咄嗟に、ひとつの戦略を思いついた。あと、

必要なものは——彼はジャケットのポケットを探り、右のポケットから煙草の箱とライターを取り出した。宙空施設は基本的に、否、厳格に禁煙である。リチャードをはじめ愛煙者は、設置された専用の喫煙室でしか煙草を吸うことは原理的に不可能なはずなのだ。だから、うまくゆけば……けっこうな賭けになるが、イチかバチかやってみるほかない。

リチャードは箱から煙草を抜き取った。最後の一本であった。リチャードはもう一度壁に身を隠しつつ待合室を窺い見た。待合室のほうでは、まだニコライが事務室の奥に置いてあるのだろう金庫の電子ロックを震える手で解いている最中らしく、相変わらずのこう着状態が続いていた。ただ、強盗の荒い息づかいが待合室に響くばかりである。

リチャードは姿勢を戻して煙草を口に咥え、なるべく静かにライターで火をつけた。そして、すぐさま煙草を手を持ち、ピンと指で待合室へ投げやった。その煙草は弧を描きつつ、誰にも気づかれずに待合室内の床に落下した。リチャードは息を潜めて、紫煙が火災報知機に行き着くのを待った。

一瞬の間があった。

直後、けたたましい警報が耳をつんざかんばかりに室内に鳴り響き、次いで、待合室の天井の各所に設置された消火用スプリンクラーから鉄砲水のごとく放水が始まった。またたく間に室内は土砂降りの嵐のなかに立っているかのようになった。

リチャードはすかさず強盜のほうを見た。強盜は突然の轟音と放水に打たれたことに驚き、そこにわずかな隙が生まれた。

その瞬間を突いて人質となっていた若者は強盜の腕を逃れた。そしてリチャードは意を決して、姿勢を低くして強盜の腰にしがみつくように飛びかかった。

不意の突進でバランスを崩した強盜は「あつ、この！」と叫びながら、リチャードもろとも床につんのめるように倒れた。そのときリチャードはしたたかに左腕を床に打ちつけ、強盜のナイフはその手からすっ飛んだ。

「ちくしょう」強盜はもがいた。「離せ！」

リチャードの腕が、なおも抵抗する強盜の思いがけない怪力に振り払われそうになる瞬間、事態の急展開に呆けていたほかの従業員たちも加勢した。「この」「やろ」「うぬ」「てめ」とそれぞれの怒号とスプリングラーからの放水が飛び交うなか、リチャードの左腕はどこからともなくじんわりと痛みを主張しだし、彼の腹はもみ合っているうちに強盜の膝の直撃を受けた。リチャードはひとり「く、く、く」と呻いた。

その後、火災報知機の警報によって駆けつけた消防隊や警察によって、リチャードらに押さえつけられた革ジャンの強盗は御用となった。現場にいた誰しもが、ぐうの音も出ないほどずぶ濡れになりはしたが、幸い大した怪我人もなく事件は解決したのだった。なににせよ、彼の賭けが功を奏した結果となった。

しかし、当のリチャードはといえば、消防隊に借りたタオルで身体を拭いながら「もうちょっとほかの手はなかったのだろうか」と後悔もした。スタンドの設備に若干の——であればいいのだが——水被害があったにも関わらず、ニコライたちがリチャードを囲んで礼を言ってくれたことに、心がすこし痛んだ。

水浸しのスタンドの待合室で、リチャードは警察からしばらく事情聴取を受けたあと、その日は放免となった。後日あらためて、調書を取るために警察に出頭してほしいとのことだった。

結局、リチャードが全身生乾きなまがわの姿でようやく会社に戻ったころには、本来の帰投時間からすでに二時間近く経っていたのだった。まったくなんという一日であろうかと、リチャードの心もちは重かった。

連絡を聞いたらしいリナが心配顔で彼を出迎えてくれたが、ナターリアは話を聞くなり、「水汲くみに行つて、水を浴びて帰ってくるんだから、世話はないわね」と、顔の化粧が弾け

飛びそうなほど盛大に大笑いして、さっさと勤務に戻っていった。リチャードにはムスリと眉をひそめる元氣すらなかった。

リチャードがロッカー・ルームで濡れた服から予備の服に着替え、眠たげに目を擦りながら広いとはいえない事務室に入ると、リナが熱いコーヒーを淹れてくれている。

「災難でしたね」そう言いながら、彼女はリチャードに「よかったら」と、マグカップを手渡した。

「ああ、ありがとう」リチャードは思いがけない彼女の気遣いにすこし驚きながら、それを受け取った。「本当に良かったよ」

リチャードは苦笑いを浮かべながら手近な椅子を引き寄せて腰を下ろすと、コーヒーの温度をたしかめるようにひと口だけ口に含んだ。そのコーヒーはいつもと同じだったが、いまばかりは特別美味しく感じた。肌にべっとりとまとわりついた疲れが、まるで絡まった糸がほどけるように取り払われる気がした。

「あ、そうだ」リナが言った。「社長からすこし前に、きょうはどうしてもこちらには戻れそうにないと電話がありました。用事は次に出社するときでいいそうです」

「うん、わかった」そういえば無線でリナからそんなことを伝えられていたなど、リチャードは思い出した。多分、本当にたいしたことのない用なのだろう。たまにあるのだ、あの御

仁は。「ありがとう」

「でも強盗だなんて……」その場に立ったままのリナは、心配そうに尋ねた。「怪我はありませんか？」

「とくには。ずいぶんと濡れたけどね」

リチャードは、まだ乾ききらない髪を指差しておどけてみせた。そのとき、床に打ち付けた左腕——というより、手首がすこしだけズキリと痛んだ。転げた拍子に挫いたのかもしれない。気が緩んだからだろうか、いままで大して痛みもなかったのに不思議なことだ。そんなことを考えながら、リチャードが思わず右手で左手首をさすると「大丈夫ですか？」とリナが心配そうな声を上げた。

「ああ、軽く挫いただけだと思うから」

「せめて湿布かなにか……」

そう言い終わる前にきびすを返したリナは、事務室の隅に設置された棚の前に立つと、救急箱を引っ張り出した。それから冷湿布一枚と包帯を取り出すと、リチャードにシャツの袖をまくるように促した。リチャードはそれにおとなしく従い、左手首を彼女に差し出した。

「気にすることないのに」

「いいえ。大事になつてもいけません」

そう言いながら、リナは冷湿布をシートから剥がした。メントールのにおいが、やんわりとリチャードの鼻を突く。彼女は湿布をリチャードの左手首に巻くように貼りつけ、その上に剥がれないように軽く包帯を巻いた。器用に、そして正確に作業をこなすリナの細くしなやかな指先をリチャードはぼんやりと眺め、彼女はこんなふうに機械も直してしまうのだからかと考えた。

「ありがとう」リチャードは礼を言い、シャツの袖を戻した。「ところで、きょうは残業だったのかい？」

「え？」リナは、救急箱を棚に戻しながら顔だけリチャードのほうに向けた。「なぜですか」「いや、こんな時間にまだここにいたから。きょうのシフトはとくに終わっているだろう」「あ、はい、そうなんです」リナは救急箱を棚に押しやって振り返ると、すこし早口に言った。「ちよつとやり残した仕事があつたものですから」

「それは、お疲れ様」

リチャードは頷いて、コーヒーをすすった。そのときリナの右手が、ちよつぴりくやしそうに握られるのに、彼は気づかなかった。

「そういえば——」リチャードは彼女に尋ねた。「無線でなにかを言おうとしていたけれど、僕に用事でもあつた？」

「いえ、あれは……」リナはリチャードのそばに戻って首を横に振った。「整備のことで、お伝えしないといけないことがあったような気がしたんですが、勘違いでした。すみません」

「いや、謝ることはないよ」リチャードは右手を上げて、気にするなどジェスチャーした。

リチャードは、カップに残った最後のコーヒーをすすする。リナはそのそばで、気づかれないうようにそわそわと視線を宙に泳がせた。リチャードはカップを口元から離すと、「さて」と立ち上がった。

「コーヒーと、それから湿布をありがとう」

彼が、並ぶとひとまわり小柄なリナに礼を言うのと、彼女は理知的な目を細めて微笑した。

「どういたしまして」

「じゃあ、僕はこれを片付けて……」帰るよ、とリチャードが言いかかったとき、リナが声を上げた。

「あの、リチャードさん」彼女の大きなブラウンの瞳が、リチャードの顔をくつと見上げて言った。「夕ご飯まだですよね」

「あ、ああ」やり場なく開かれた口のまま、おろおろとリチャードは答えた。「まだだよ」

「わたしもまだなんです。よかったら、その、どこか一緒に食事に行きませんか？」

ひと息にそう言ったリナに、リチャードはしどろに頷いた。

「え、そりゃあ、いいけれど」

「ほんとに？　ありがとうございます」リナの表情がぱっと明るくなる。「あ、カップ、わたしは片付けますから、ちょっと待っていてください」

そう言うが早い、彼女はリチャードの手からマグカップを取って、くるりときびすを返し、結んだ髪を揺らしながら給湯室へと足早に入ってしまった。次いで、カップを洗う水の音が聞こえてくる。

彼女がカップを洗うその音が聞きながら、リチャードはなんとなく煙草を吸いたくなった。彼は無意識に着ている服のポケットを探したが、なにも出てこなかった。

そりゃそうだ——リチャードは心のなかでひとりごちた——ジャケットはいまロッカー・ルームに干してあるし、スタンドで火をつけたのが最後の一本だったのだから。それに、ここでは吸えやしない。いま一度濡れネズミになるのは、まっぴらごめんだった。

けれどリチャードは、やはりどういうわけか落ち着かない気分に襲われた。それはなんだか懐かし、久しく彼が忘れていた感覚だった。だが、それがなんだったかは思い出せない。

ふと顔を上げると、ふたりのやりとりをこっそり自分のデスクから眺めていたらしいナタリーアと目が合った。そのしたり顔に、なんとも知れぬ居心地の悪さを感じたりリチャードはその視線から逃れようと、リナが駆けていった給湯室の入り口へ顔を向けた。そして、リ

ナが巻いてくれた湿布でひんやりと冷たい左手首を無意識にさすりながら、彼女が出てくるのを待ったのだった。

月曜日、または《LADY BLUE》
Monday: or *LADY BLUE*

地球から宇宙への玄関となる国際軌道第一宇宙港には、〈港〉としての機能を備えたターミナルだけでなく、商業や娯楽といった様々な用途をもった区画もいたるところに点在している。この建造物が宙に浮く巻貝に喩えられるがごとく、その内的機能も貝殻のなかの内蔵のように多種多様だった。

飲食街や歓楽街もそのひとつで、おそらく港内でもっとも活気に溢れた区画だといえる。殊に歓楽街は、均整な意匠を持つ港内において、比較的——否、けっこう猥雑な雰囲気ことを醸している。あえて暗く設定された路地の照明のなか、色とりどりにネオン・サインが浮かび、そして店舗のウインドウからもれる灯かりが織り成す景色は、原理的に眠ることのない宙空施設内においてお目にかかる数少ない夜のまどろみだった。

いまリチャード・コーエンがいる酒場バブ（夜の翼ナイトウィング）も、そんな区画の片隅にあった。

「世のメス族のために乾杯！ 女なんかにくヨクヨするな！」

リチャードの向かいに座っている同僚で、彼と同じくタクシー・ドライバーのダニエル・デヴィスはそう叫ぶと、ウォッカがなみなみ注がれたグラスを太い腕で勢いよく持ち上げて、ひと息にあおった。どうやら、また追っかけていた女性にフラれたらしい。

「できればの話だがな、リック」喉を焼くウォッカの刺激が遠のいたあと、ダニエルはそう小さく付け加えた。「ちくしょうめ」

「お前さんには無理そうだな、ダン」リチャードは腕を組み、やれやれと答えた。

リチャードは胸中で「またか」とつぶやいた。ダニエルから電話があつたのが一時間ほど前。その電話では夕食と一緒にどうだ、というふうな話であつたのに、いざ出向いてみればこのさまである。思い返せば電話の向こう側から聞こえるダニエルの声は、妙に陽気だった。あれはダニエルなりの空元カラ気であり、失意にあるときの彼の癖であることをリチャードもなんとなく気づいてはいた。つまり、いまリチャードの置かれた状況は、やつの失恋の絡み酒というわけだった。

「うるせえ」ダニエルはうつむいたまま呻うめいた。すつかりできあがつて、いるようだ。「お前みたいに涼しい顔して、ブツダよろしく禁欲に生きているよりなんぼかマシだよ」

リチャードとしては恋愛に限らず、無理をして交友関係を拓げることもないだろうと考えているだけであり、決して自分を禁欲な人間とも思っていないが、とくに言い返すこともしなかった。ダニエルの癩癬かんしやくの矛先が自分に向いては本末転倒だし、それに——とリチャードは思う——きっと彼のほうが人間として普通なのだ。

ダニエルはウェイターを呼んで、ウオッカのおかわりを注文した。そして、酒がまわって暑くなったのだろう、着ていたボマー・ジャケットを脱いで隣のイスに置くと、低く「むむむ」と齒軋りしては、彼を捨て置いた女への怨念を発散させた。ゆるやかな店内の雰囲気は局所的にぶち壊しとなり、スピーカーから流れるスモース・ジャズはむしろ滑稽に聞こえた。ほかに客がいないのが、せめてもの救いである。

とはいうものの、彼も普段はひょうきんで気のいい男なのである。うれしいときには莞爾かんじと笑う明朗快活な男だ。リチャードとダニエルは同僚のなかでは年齢も近く、同時期に入社したこともあって、付き合いはそれなりにあったから、それは断言できる。リチャードにとつて、ダニエルは宇宙での数少ない友人だった。

が、ことほど女性との交際となると、彼はたいていこうなってしまう。今回のようなことも一度や二度ではない。こっぴどい心の傷を受けては、アルコールで消毒をしに、こうして酒場にやってくるのだった。これもまた、五年ばかりの付き合いのなかで証明されたダニエ

ルの性格であった。

惚^ほれっぽい性格なのはたしかであり、異性からそれなりにモテもするのだが、どうしてこうもその後がうまくゆかないのだろうか。やつが悪いのか、やつの選ぶ相手が悪いのか、それとも——ブツダがいるなら、ぜひ教えを請いたいリチャードである。友人が全身全霊で挑む恋の駆け引きについて、リチャードはあまりに門外漢だった。

「けど、お前も最近、春遠からじなんだって？」ダニエルは新しくやってきたウォッカのグラスをリチャードに向けて、口元をニヤリとゆがめた。

「なんのことだ」

リチャードは、突然のまったく身に覚えのない話題にきよんとした。

「寝惚けるんじゃないの。ナターリアから聞いたぞ。最近、技術師のうら若きリナ嬢とずいぶん仲よしだってな。このあいだ、仕事終わりにふたりして出かけたそうじゃないか。この色男め」

ダニエルの口から唐突にまろび出たリナの名前に、リチャードはわけもなく驚いた。そして、そんな思いがけない感情と話題の展開を抑えるべくリチャードは長いため息をついた。下手をすると、そんな事実無根の話を種に、やつの本格的な絡み酒に晒^{さら}されてしまう。

「たまたま退社時間が被ったから、一緒に夕飯を食べただけで、お前さんやナターリアが期

待するような関係じゃないよ。その後どうしたもこうしたもない」

実際そうだったのだし、弁明するまでもないことのはずなのだが、喋れば喋るだけ弁明がましく聞こえるのがリチャードには癪だった。リナはたしかに腕の立つ技術師で、それなりに仲のいい後輩社員だが、それだけのことだ。そのはずなのだ。

「いったい——」リチャードは憮然と聞いた。「なにがどう転んでそういう話になるんだ」

「どう考えたって、そうだろう」ダニエルはなおも食いついた。「これは好機だぜ」

「飛躍がすぎる」ふたりとも連続ドラマ^{ソープ・オペラ}の見すぎなんだ、と毒づきかけて、リチャードは思い留まった。「向こうにだって、そんな気があるものか」

「けど、麗しのリナ嬢のことは憎からず思ってるんだろう？」

「そういう回答者の意図を無視する誘導尋問はご免だ」

「そうかい」ダニエルはウオッカをつまらなそうに舐めた。「たまにはお前も浮ついてみろよ、面白くもない」

「僕のささやか噂話も結構だが——」リチャードは大きくかぶりを振った。「そろそろ本題に入れよ」

「本題？」ダニエルはしばらく虚空と睨めっこをしていたが、ふとリチャードをここに呼びつけた理由を思い出した。「ああ、そうだった。そうなんだ」

ようやくダニエルの感情のやり場を修正することができて、リチャードはほっと息をついた。自分についての話題をこれ以上続けたところで不毛だし、なによりリナに不名誉だとは思った。

「それはそうと……」 持っていたグラスを空けると、ダニエルが言った。「なんでお前は呑まねェんだよ」

「あのな、だからこのあとナイト・シフトだと先に言つたろう」リチャードは手元にあるアイステイーのグラスを持つと、半分ほどひと息に飲んだ。「酒なんか呑むわけにいくもんか。それに僕は、夕飯を食べに来たんだ！」

呑めるものなら呑みたいと突発的に思うくらいには、先ほどのやり取りでイラついていらしい。思わず少々怒鳴り声になってしまったことに、リチャードは自分でも驚いた。

「そうか……、いや」ダニエルは一度目をそらし、手に持ったグラスにその視線を落とした。そしてバツの悪そうに続けた。「すまん、ちよつとばかし動転していたんだ。その……気が」「いや……、いいんだ」リチャードは肩をすくめてみせ、声を荒げたことを胸の内ですこし反省した。「それで、今回の相手はどんな感じだったんだ？ 敗因は？」

「聞いてくれるか？」

「ああ、教えてくれよ」

その後、リチャードはダニエルの相手をして一時間ほど〈夜の翼〉で過ごした。なるべくダニエルが愚痴を話しやすいように気をつけて質問を投げかけながら、リチャードは彼の破れた恋の顛末を聞いてやった。ダニエルに大いに同情する部分もあれば、彼の主観ゆえに少々首をひねる部分もないではなかった——概してそんなものだ——が、それでも話すうちに気分が落ち着いてきたのだらう。彼はずいぶん元気になって「今夜は徹底的に呑むぞ」と最後には意気込んでみせた。

やがて出社の時間が近づいたので、リチャードはダニエルを店に残して会社へと向かった。

○

現在、時刻は二〇時をすこしまわったあたりだった。この国際軌道第一宇宙港を含む軌道上施設の時間は、地球の本初子午線上の時刻に設定されている。すなわち、ロンドンでの時刻と同じと考えればいい。あまねく軌道上ならびに宇宙施設において国境の概念は存在しないが、それは時間設定も同様で、ただ経度零度線を時間基準においたまでであった。

バスやタクシーに乗り込もうとする人々で普段どおりのにぎわいをみせる第二八ターミナルに、リチャードがいつものように会社から連れ出した自身のタクシーを停めて待つことし

ばらく。たいていの人々が大手タクシー会社の小さいな白いタクシーホワイトに流れるなか、ふとひとりの男が、リチャードの車へと近づいてきた。

すらりと背の高い初老の男だった。平均的な身の丈しかないリチャードがそのそばに立てば、まるで空を見上げるほどだっただろう。おそらく二メートル近く、否、もしかしたらそれ以上あるのではなからうか。その男は暗めのグレイのスーツを着ており、その反対に彼の髪はそのほとんどが白くなってしまっていた。

老人は後部座席のドアを開けると、身を折るようになしてかがめ、リチャードに声をかけた。「いいかね？」

彫りの深い面長の顔に柔和な微笑を浮かべたその老人は、まだまだ健康そうな白い歯を口元にのぞかせた。その顔を見て、リチャードは「あれ？」と思った。なぜかその老人の顔に見覚えがあったのだ。

「ええ、どうぞ、お乗りください」その疑問符を顔に出さないようにしながら、リチャードはそう応えた。「ああ、頭を気をつけて」

「ありがとう」そう言いながら老人は、平均を大きく上まわる長身をタクシーへと押し込んだ。リチャードのタクシーは車体もそれなりの大きさだし、広めの内装なのだが、その老人が身体を丸めるように乗車しているのを見ると、まるでミニカーのような気さえてくる。

彼が少々窮屈そうに座席に腰を落ち着かせると、リチャードはシートベルトをするように促し、行き先を尋ねた。

「どちらまで？」

「ああ、その……」老人は一度言いよどむかのように右手を口元へやった。「変に思われるかもしれないが、実は、少々ドライブに付き合ってほしいのです」

「はあ」

「この座標^{アドレス}付近に連れて行ってほしい。頼めないでしょうか」

そう言つて老人は、胸元から一枚の折りたたんだ紙を取り出して、リチャードに手渡した。その紙を開くと、印刷された文字で、座標が書かれていた。

「ちよつとお待ちください」リチャードはナビ・システムにその座標を照会した。

その結果を見て、リチャードは首をひねった。その座標近くに、これといって軌道上施設はなにも存在しない。航宙機さえめつたに通らないまったくの空いた空間だった。

リチャードは老人に向き直った。

「本当に、ここへ？」

「ええ、そこへ連れて行ってほしいのです」老人はまっすぐリチャードを見て言った。

老人の目は、酔狂者の眼差し^{まなざ}ではないことを、リチャードは瞬間的に感じ取っていた。切

実で真摯な願いを抱いている、そんな眼差しだった。

「……わかりました」

リチャードは身体の向きを直し、ハンドルを握った。そして料金メーターをオンにし、アクセルを踏み込んだ。

「ありがとう」老人は静かに礼を言った。

タクシーを第二ハターミナルのエアロックに向かつて走らせながら、リチャードはバックミラーを見つつ、老人に話しかけた。

「こんなことをお尋ねするのは失礼かもしれませんが、しかしどうしてまた、このなにもない場所へ行かれるのです？」

ミラー越しに見える老人は、どこか哀しげな表情で車窓の外を眺めていた。

「そこに行くことは、私にとつての墓参りなのです」

「墓参り？」

「そう、私が生涯でもっとも愛した女性の……。そして、これが彼女に私のできる唯一の墓参りなのです」そして老人はふっと笑みをこぼし、リチャードを見やった。「……目的座標まで時間もありません。もしよければ、お話ししましょう。それに、聞いていただくことが、彼女への弔いにもなると思うのです」

「聞かせてください」と、リチャードは応えた。普段の彼は乗客とおしゃべりするような性格ではなかったが、しかし老人の不思議な面持ちに興味を惹かれたのだ。

老人は静かに「いいですとも」と頷いて車窓に目を戻すと、ぼつりぼつりと語り始めた。

○

——もう、三十年近くも前になります。私が、彼女に出会ったのは。

そのころは、すでにもう宇宙開発や月面の資源開拓もおおむね軌道に乗り、宇宙旅行、移住などもほとんど一般化してきていた時期でした。宇宙開発の黎明期が幕を下ろし、多くの航宙機が地球と宇宙港を、宇宙港と軌道施設、そして月とを行き来し出していました。地球の都市と都市とを巡るのとはほとんど同じように、人々が宇宙の往来をし始めた時期だったと思います。

私はすでにそのころ、月の中央区——といっても、そのはずれですが——に住んでいて、ほそぼそとながら物書きを生業なりわいとして暮らしていました。エージェントが拾ってくる仕事をこなしていたわけですが、まだまだ仕事の受注にもむらがありましたし、私も若く、売れっ子というわけでも到底ありませんでしたから、時期によっては時間ばかりあまってぶらぶら

したりしていました。経済的にも不安定な日々を送っていたわけです。

私はその日、いくつかの締切りを抱えていました。前日から徹夜をしてどうにかこうにか原稿を見繕って、鞆を片手にそれぞれの出版社へとその原稿データを届けに行ったのです。

先天的に計画性がないというか、ともかくその日も脱稿したのが時間ギリギリで、最後に出版社の支店があるビルを出るころには、もう夜も遅くになっていました。通りを行く人もまばらです。それでも、抱えていた仕事を一挙に片付けられたことにひとしおの開放感を得ていました。それで、どうせ明日からしばらく暇になるのだからと、馴染みの店で一杯ひっかけたやろうと考えて、そちらに足を向けたのです。

セントラル・アベニューから逸れた路地に入ってすぐでした。私の背中にどすんとなにかが倒れかかってきました。そして、そのままそれは私の足許に倒れこんだのです。

それが、彼女との出会いでした。ブルー・ジーンズにグレイのパーカー姿の若い女性——少女といっても通じるくらいにも見えましたが、荒い息について横たわっていたのです。「どうしたんです？　大丈夫ですか」

私は膝について、彼女の肩を軽く揺すりました。しかし、彼女は苦しそうに息を吐くばかりで、触れた肩は驚くほど熱かったのです。

私はいったん彼女を仰向けに寝かせ、彼女の頭を手で支えました。高熱のせいで頬は赤く

染まり、肩にかかった赤毛はぐつしよりと汗で濡れていました。

私は顔を上げて周りを見ましたが、間の悪いことにちょうど誰も人は近くにいなかったのです。近くには、彼女のものなのでしょう、大きなリュックサックが転がっていました。

「この近くの方ですか。お送りしましょう。お名前は、なんていうんです」

彼女は苦しげに口を動かしました。

「わ、わたしは……」

しかし、すぐに彼女はめんどろそうに首を横にふり、そしてついには氣を失ってしまったのです。

「しつかり。大丈夫ですか」

私は何度か声をかけましたが、彼女は目をきつく瞑って、苦しげに息を吐くばかりでした。幸い、近くにかかりつけの総合病院を知っていましたので——ちよっとした事情で、私も長いこと通院していたのです——私はとにかく、病院へ連れて行くことにしたのです。

ドクターがいうには、彼女は軽い“宇宙酔い”だということでした。ご存知のように、低重力や無重力状態に慣れていない人がたまに起こしてしまうのです。彼女のリュックサックのなかから出てきたパスポートを見ると、彼女は地球から今回はじめて渡航してきたらしいことがわかりました。それに彼女の場合、おそらく旅の疲れがひびいたのでしょう。とりあ

えず、ひと晩は安静が必要だということでした。

手続きを済ませてから病室を覗くと、点滴が効いたのでしよう、彼女はベッドの上で静かに眠っていました。穏やかな呼吸です。ひとまずこれで大丈夫だろうと思い、私が病室を出ようとしたときでした。私に気づいたららしい彼女が、弱々しい声で私を呼び止めたのです。

「ここは、どこですか」

私はベッドのそばまで戻って身体をかがめ、なるべく静かに答えました。

「中央区の病院です」

「月の、ですよね」

「そうです。あなたは、セントラル・アベニュー近くで倒れて、気を失ってしまったのです。それで私が、この病院まで運んできたのです」その言葉を聞いて、彼女が不安げな瞳を私に向けたので、私は慌てて付け加えました。「軽い宇宙酔いだそうです。ひと晩ゆっくり休めば、まず、よくなりますよ」

「そうですか……」

彼女は安心したように表情を緩ませて、私に礼を言いました。私が、気にすることはない、と言いつ終えるか終えないうちに、彼女はすうっと、再び眠りに戻っていききました。

それを見届けた私は、病棟の看護師にひと言挨拶をして、病院をあとにしました。

結局、酒を呑む気も失せ、時間もすでに深夜をまわっていましたから、私は自分の部屋に帰ることにしました。

その道中、なぜか心もちがふわりと軽くなったように感じ、何度か、無意識のうちに病院の方を振り返りました。きっと、このときすでに私は、あの名前も知らぬ彼女にそこはかとなく魅かれていたのでしょうか。私に礼を言ってくれたときの彼女のほころんだ顔が、目を閉じれば去来するかのようでした。

ただ、自分と彼女はまったくの赤の他人です。その日はいまのような偶然があったとはいえ、二度と彼女と会うことはない——それを思うと、どこか胸中をすきま風が冷たく通り過ぎていくような心地がするのです。もう一度、彼女に会えたら——そう思っていたに相違ありません。

しかし、その願いは意外なほど早く叶うことになるのです。

翌日、私が目を覚ましたのは、昼もとうにまわった午後二時くらいだったでしょう。前日までの徹夜続きと、突然のアクシデントが普段よりも過剰な睡眠を誘発したのでしょう。とはいっても、こんな時間に目を覚ますことも私には珍しくないことでしたし、なによりこれから数日間は、とくにこれといった仕事もなく暇——しばしの休日が与えられたようなものです。とくに焦ることもなく、のろのろとベッドから起き出し、寝間着を脱いでシャワー

を浴びに浴室に入りました。

シャワーを終えて服を着替え、冷蔵庫から牛乳を取り出して飲もうかというときでした。突然、私の部屋のドア・ベルが鳴ったのです。私の部屋に訪ねてくる人物など滅多にいませんでしたから、いささか驚きつつも、おそらく荷物でも宅配されてきたのだろうと思い、ドアを開けたのです。

そこには、思いがけない人物が立っていたのです。

「あの、突然すみません」

それは、きのうの彼女だったのです。もうすっかり良くなったとみえて、すつくと立ち、凜とした瞳で私の方を見上げていました。と同時に、私の身長に少々驚いていたようです。「昨晩は、たいへんお世話になって、すみませんでした。それで、なにもお礼ができなくて、せめて挨拶をと思つて、お邪魔しました」そう言つて彼女は深々と頭を下げてくれました。「本当にありがとうございます」

「いいんですよ。頭を上げてください」私は慌てて手をあちやこちに振りつつ、そう伝えました。「もう、体調のほうはいいんですか」

「はい、すっかり」

「そうですか。それはなによりです」

「それで、あの……今朝、起きてみたらこれが病室のベッドのそばにあつて……」彼女は、ドアのへりの壁にもたれさせていたのであろうそれを一度かがんで手に取りました。「これ、もしかしてあなたの鞆ではありませんか」

そう言つて彼女が私に差し出したのは、紛れもなく私の鞆でした。その鞆には、私のラツプ・トップやらメモリ・スティックやらが入ったもので、なくしたら最後、私の失職は必至という、私にとつての生命線だったのです。おそらく、きのう彼女の病室に行つたときに忘れてきてしまったのでしょうか。思い返してみても、たしかに帰宅したとき鞆を部屋の定位置に置いたという記憶はありません。

「ええ。ええ、そうです！」私は思わず前のめりになつてそれを受け取っていました。「いやあ、ありがとう。これがないと、食いつばぐれるところでした。本当にありがとう」

「よかった。大事なものだつたんですね」彼女はそう言つて微笑みました。笑つたとき、彼女の左の頬に可愛らしいえくぼができることに、私はそのとき気がつきました。「それでは、これで失礼します。本当にお世話になりました」

彼女がもう一度頭を下げ、そして自分の前から立ち去ろうとしたときでした。このままで彼女と一生もう二度と会うことはなくなつてしまふ——しかし、彼女ともつと話して欲しい、という説明のつかない衝動に駆られ、とつさに彼女に声をかけたのです。

「あー！」

「はい？」

「よかったら、一緒にお茶でもいかがですか？　すぐそこに美味しい珈琲屋カフェがあるんです。靴のお札に、ご馳走させていただきます。その……もしお嫌でなかったら、ですけど」

人生でそのときほど緊張したことは、もしかしたらなかったかもしれませんが。最後のほうなどは、ほとんど声もかすれて出ていなかったでしょうから。

彼女は数秒間考える仕草をして、それからにこりと私に微笑んで言いました。

「ありがとう、それじゃあ喜んで」

その言葉に私は天にも昇るような気分になりました。

「でも——」と、彼女は続けました。「“ご馳走”って部分はなし。だって、お札をするほうとされるほうがあべこべになっちゃうもの。圧倒的に世話になったのはわたしなんですから。だから、そう——割り勘でだったら喜んで」

そう言って、もう一度はにcanで白い歯をのぞかせました。

私はもちろん、と答え、すぐさま部屋のなかにとって返して支度をし、そして彼女を連れてその珈琲屋に向かったのです。

その珈琲屋で、私たちは雑談交じりにお互いのことを語り合いました。私は、きのうの彼

女との出会いの顛末てんまつを説明しました。

「じゃあ、作家さんなんですか」

「ええ、まあ、かいつまんでいえば」

「すごい！　なんていう本ですか？」

「いや……」私は苦笑しました。「まだ、本にはなっていないんです。雑誌に載っただけで」

「今度ぜひ読ませてくださいね」

私はごまかすようにふたつ返事をするに留めました。

彼女も、自分の生い立ちについていろいろなことを私に話してくれました。会話のはしばしに立ち現れる機智やユーモアに、彼女の教養の高さや、独特の人生観を垣間見せられました。快活で知的なその話しぶりに、私はさらに魅かれていったのです。

そういった会話のなかで私は、彼女がイラストレーターであることを知りました。私には絵心が皆目備わっていないので、ずいぶん感心したことを覚えています。

「まだ、ほんのひよっこです」彼女は言いました。

「でも、それを仕事にしているんでしょう」

「全然そんなことはありませんよ。副業の域をまだ出ていませんしね」彼女は笑いました。「絵だけじゃ、まだ食べていけないし、それに好きな物だってまだまだ描かせてもらえませんか

ら。いずれは、独立してやっていきたいですけれど」

そのあと、彼女はスケッチブックを私に見せてくれました。そこに描かれていたのは、多くが空と雲をモチーフとしたものでした。鉛筆の繊細でやわらかな線の上に、淡くみずみずしい青と白の絵の具——透明水彩というのだそうです——による絶妙な配色とコントラストに私は目を奪われました。

次のページをめくると、砂浜で戯れる少女と猫の絵でした。そのふたりの後ろには、くすんだ空が浮かんでいるのでした。まるで、もうじき雨が降るかのように、水気を含んでいるような気さえする色合いです。

私は夢中になって、スケッチブックのページをめくりました。なにか、私の心にうったえかけるものが、彼女の絵にはあったのです。

美しい、と素直に感じました。言葉にすると陳腐ですが、しかし見た瞬間、そのように感じたのです。もちろん彼女にも——本人は習作だからと言って、さっさと私からスケッチブックを取り上げてしまいましたけれど——そう伝えました。しかし、そのときにはまだ、私がなぜ彼女の絵にそこまで心魅かれるか、自分でもよくはわかりませんでした。

「月には、旅行で来たんです。自分の知らない新しいものが見られるんじゃないかと思って」
彼女はそう言ったあと、この近くに書店はないか、と私に尋ねました。理由を尋ねると、

彼女にはこの旅行でいくつか行ってみたいところがあるらしいのですが、先だって買っていたガイド・マップをなくしてしまったのだそうです。だから、新たにガイド・マップを買に行きたいのだと。

それを聞いたとき、私は心のなかでガッツ・ポーズを決めていました。長いこと月で暮らしてきた私にとって、月面都市の地理など手に取るようにわかるのです。これを逃す手はないと、瞬時に確信していました。そして、さしでがましいとは思いつつも、例の説明のつかない衝動によって、私は彼女に道案内を買って出たのです。

無論、断られるだろうと半分あきらめていたのですが、驚いたことに、彼女はこの申し出を断るところか、快諾してくれたのです。

「実はわたし、すごく方向音痴なんです。地図を追うのも苦手なくらいで……。でも、本当にいいんですか？ お忙しいのでは」

「いえ、きのう脱稿した諸々で、しばらく時間が空いていたんですが、僕もこれといって予定もなかったですから」

「それじゃあ——」彼女はつかの間、考えるように手元を見つめました。「よろしくお願いします」

「……ちらこそ」

それから後の数日間、私は道案内として、彼女についてまわりました。彼女を連れてか、それとも彼女に連れられてか、様々な場所に出かけていったのです。

《静かの海》にある月開拓史博物館などにも出かけましたし、彼女のたつての希望で、宇宙服を借り出してエアロックの外に飛び出し、砂地に寝転がって星空を眺めたりもしました。「地球とは、違うのでしょうか？」

地球で見られる星々は、月と比べて等星がひと段階低いのだと聞きます。地上と月面では、見られる星の絶対数が違うのです。地上とは数も明るさも格段に上がった月面からの星空を見て、彼女はまるで少女のようにはしゃいでいました。

ある日には、彼女にせがまれて、私は自分の短篇が載った雑誌を何冊か見せることにもなりました。珈琲屋のテーブルに座って黙々とその雑誌を読む彼女の向かいで、私はまんじりともできない気分になって、ずいぶんと恥ずかしい思いをする羽目になりました。彼女は静かに私の作品を読み終えると、こちらにしっかりと視線を向け、的確な批評をしてくれたものです。

こんなふうに誰かと方々^{ほうぼう}に出かけたり、お喋りをしたりして過ごすのは、親も早くに亡くし、ひとりで過ごす時間がほとんどだった私にとって、素晴らしく、そして新鮮な体験でした。しかも、その相手がなんともいえぬ素敵な女性なのです。私は、時間が過ぎるのも忘れ、

彼女と過ごす日々には陶酔していました。

そのようにして数日間が流れるように過ぎました。そして、いよいよ彼女が地球に戻る日がやってきたのです。

私たちは連れだつて月面港のゲートにやってきました。ふたりしてゲートの前に立つと、もういよいよかと、私はなんとも言えぬ気分になりました。

私はゲートのこちら側に残り、そして彼女はゲートの向こう側へと行つてしまふ。それは当たり前のことです。

しかし、私の心の奥底はそれを拒絶し、彼女とのこの出会いを単なるゆきずりのひとときとして終わらせたくはない、と強く叫んでいました。つまり、出会つてからの数日間を共に過ごすうちに、私は彼女のことを愛するようになっていたのです。私は、そのことに気づいたとき混乱もしました。その瞬間まで、そんな強い感情を誰かに抱いたことなどなかったのですから。

ですが、躊躇している暇はありません。彼女が、私に別れを告げてゲートをくぐろうとしたまさにそのとき、彼女に自分の気持ちを伝えようと決心したのでした。咄嗟に「あの」と、彼女を呼び止めます。

それに次の言葉を続けるまでの一瞬のあいだ、私の脳裏には意中の相手にその愛を告白す

る様々な小説や映画の主人公たちの姿が次々に去来しました。まるで『ニュー・シネマ・パラダイス』のラスト・シーンを観るかのようでした。きつとそれは、彼らのようにただひと言「愛してる」と彼女に伝えなければ、と無意識に自分を鼓舞していたからなのでしょう。そして、ついに彼女が私に振り向いたとき、私の口から出た言葉はしかし、我ながら弱々しく、拍子抜けするものでした。

「また……、会えますか？」

その私の言葉を聞いた彼女は、二度三度まばたきました。それから私の言葉の意味を吟味するように、静かに深呼吸しました。

そのあいだ私はいえ、自分の口からまろび出た言葉のあまりの迂遠^{うえん}さと、それを発した自分自身に落胆していました。私の元来の臆病さが頭をもたげたのもあるでしょう。それに、いともなめらかに「愛してる」なんて言えるほど、私はお洒落ではなかったのでしょうか。思えば、そのころの私は、その言葉を自分の作品ですら使ったことはなかったのです。慌てふためいて言葉を継ごうにも、そのときの私は息が詰まるばかりで、すっかり固まってしまったのです。

すると、不意に彼女は、私が知らず知らずのうちに力一杯握り締めていた右手を、その両手で包み取って私の目を覗き込みました。

「わたしと、また会っていただけますか？」

「……はい」と、私はなんとかそれだけ答えました。

「だったら——」彼女はやさしく目を細めました。「ぜひ、喜んで」

このとき私は、彼女と通じ合えたのだと、わけもなく確信できたのです。これはあとで聞いたことですが、彼女もこのときすでに、私に対して好意以上のものを持っていたのだそうです。とはいえ、彼女がどういった気持ちで、こんな迂遠極まる私を受け入れてくれたかはわかりません。そこまで思いをめぐらす余裕など、そのときの私にはありませんでしたから。ただただありがたくて嬉しいばかりで、彼女の手から伝わる言葉にならない温もりが、私の心を満たしていたのです。

それからというもの、普段は Cliphoner といったネット通信を介して連絡を取り合い、そして数ヶ月に一度くらいの割合で、仕事の合間に彼女が月の私のもとに訪れて——もちろん、旅券代は折半しました——数日間を共に過ごすというのが、私たちのやり方になりました。お互いの生活事情から、どちらかが一方へ移住をするというのが不可能だったからです。いわゆる遠距離恋愛というやつです。

しばらくの期間とはいえ、面と向かって会うことができないのは、たしかにさびしいものがありました。それでも、そのぶん久々に再会できたときの歓びは、なにものにも変えら

れないものでした。

そうやって過ごして三年ほど経ちました。そのころになると、私の仕事も安定して受注が入るようになり、彼女のほうもだいぶ仕事として成立するようになっていたようです。

そんなとき、ついに私の著作を書籍として発表してみないかという話が、舞い込んできたのです。

私はいてもたつてもいられず、彼女に連絡を入れました。

「僕の本が出版されることになりそうなんだ」

「本当？　よかった」彼女はわが身のことに喜んでくれました。「書き下ろし？」

「いや、とりあえずこれまでの短篇を集めた作品集らしい。でも、その売れ行き次第では、長編もやらせてもらえるかもしれない」

「そう。じゃあ楽しみにしなきゃ」

「それで、君に頼みたいことがあるんだ」

「わたしに？」

「ああ。その本の装画を、君に描いて欲しい」

彼女に自分の本の表紙を描いてもらう——それは、私自身の著作が書籍化された折には、彼女にぜひ依頼したいと予てから考えていたことでした。私が彼女に依頼したのは、風の舞かぜ

う草原で茜色の夕焼け空を見上げる少女の図でした。作品集の表題作のイメージです。このモチーフを確実に描けるのは、彼女しかいないと、私は全幅の信頼を寄せていたのです。もし、出版社側が難色を示したとしたら、なんとしても説得するつもりでいました。

「そのうち、出版社のほうから正式に君のところに依頼がゆくと思う。お願いできないかな」「……わたしの絵でいいの？」

「もちろん。あの空や雲の色合いは君にしか出せない。なにより、僕は君の絵の大ファンなのだから」

彼女はしばらくCiPhonerの向こうで考えているふうでしたが、まもなく「うん」と頷く声が聞こえてきました。

「わかった。やってみる」

それから、私の本の出版に関する話はとんとん拍子に進んでいき、正式に、装画を彼女に依頼する運びとなりました。CiPhonerを介して、出版社と私、そして彼女との間で打ち合わせが行われ、二週間後に彼女が完成作品を先にこちらに送り、その後まもなく月を訪れてくれることになりました。

期日どおりに、完成した装画が出版社の月面支社に到着した旨の連絡を受けました。翌日には彼女もこちらに着くということも聞いていたので、私は彼女の到着を待って、それから

彼女の描いてくれた装画を見ようと思っていました。

しかし、私が彼女と再び出会うことはなかったのです。

○

「出会うことはなかった？」ハンドルを切りながら、リチャードが尋ねた。「なにかあったのですか」

「事故です、旅客航空機KBM・二〇三号事故……」老人は静かに答えた。「覚えていませんか？　もう二十年以上も前になりますが、旅客航空機KBM・二〇三号事故——それにたまたま彼女が乗り合わせていたのです」

旅客航空機KBM・二〇三号事故——旅客航空機就航以来、最大の事故として記録される惨事である。サンフランシスコ国際空港を出発したKBM・二〇三号が大気圏突破目前の太平洋上で爆発、炎上し、墜落したのである。原因については、事故発生当時に様々な推測や憶測がなされたが、実際のところはいまだもって不明だった。KBM・二〇三号が全乗組員・乗客もろとも爆散した結果、生存者はなく、遺体すら発見されなかった人数もはかり知れない。リチャードは当時まだ小学校に上がったばかりだったが、盛んに報道された事故の混乱

ぶりはよく覚えていた。

その話を聞いたリチャードは、もうひとつ思い至ったことがあった。いま、自分たちが向かっている軌道はもしや……。

「いまあなたに連れて行ってもらっている場所は、その事故現場の近く——そこを見下ろせるあたりなのです」老人は言った。「そして、もうじき事故が起こった時刻になるのです」

「それで、彼女の墓参りだと……」

「ええ、そうです」

「しかし、唯一の、とはどういうことなのでしょう？ 彼女のお墓は、彼女の故郷にあるのでしょ

う？」

「ええ」

「なぜ、そちらに参られないのですか」

「いえ、参らないのではないのです」老人は、もの悲しげに微笑んだ。「参れないのです」

リチャードは首を傾げた。

「参れない、とは？」

「私は、月で生まれた人間——ルナリアンなのです。私を含め数十人しかいないと聞いています。月面や軌道施設は、基本的に低重力環境ですから、そこで生まれ育った私のような人

間は、身体の骨や筋組織が地球重力には耐えられないのです。背はうんと高くなりますが」
自虐的な笑いがもれる。「もちろん、いまは医療技術の改善と進歩がありますから、私ほどのハンディを負う人は非常に少なくなりました。然るべき時期に然るべき処置を施せば、たとえ月や宇宙で生まれ育ったとしても、地球に降りて暮らすこともできるように現在ではなっています。しかし、私はいわゆる第一世代というやつで、そのハンディをついに免れることはありませんでした。だから、私は彼女に会いに行けなかったのです」

リチャードは内心驚いていた。出産、そして幼年期の育児は地上でという箴言しんげんが次第に過去のスタンダードになりつつある現在、知識としてしか知らなかったルナリアン第一世代——その本人に出会うのは、はじめてだった。

「ルナリアン」という言葉は、『月 (Luna)』と、『異邦人 (Alien)』とをかけ合せてできた言葉だそうです。月の異邦人——言い得て妙な呼称だと思います。彼女の死後、自分が本当に異邦人だったと改めて思い知りました。彼女に会いに地球に降り立つことも、彼女の墓前に立つことも叶わないのですから。きっと、そのことで彼女に苦労も大いにかけてしまったでしょう。しかし、そんな私を、彼女は精いっぱい愛してくれました。だから、よけいに哀しいのです」

老人は、車窓の外を眺めた。夜側にいるので、地上の灯りが点々と輝いている。

「結局、彼女は絵だけを遺して逝ってしまいました。

事故後すこし経って、出版の担当者と私とで、その絵を見たのです。キャンバスには、それは素晴らしい世界が広がっていました。

夕陽の温かい光が、先ほどまでの青空を少しずつオレンジ色に染め上げてゆくあわいの時間——そこにひとりの少女が佇んでいます。彼女はまるで、雲間に吸い込まれるかのように宙を見上げているのです。そして、彼女の足許には空と同じように色を変えつつある草原が広がり、その上を冬の冷たくもやわらかな風が撫でていました。その光景を観ていると、思わず涙が流れました。

そのときになってはじめて、なぜ私が彼女の絵に魅かれるかを理解できたのです。それは、彼女の絵に、私が月面においては絶対に知り得なかったものが描かれていたからなのだと。

青や灰、朱や茜に、様々な表情に変化する空、一面に広がる緑の大地、そしてそこに流れているだろう空気や風の手触りすらも、そこにあったのです。

キャンバスの上には、たしかに世界が存在していたのです。異邦への憧れだったのかもしれない——それらは一生、私が触れることのできないものです。しかし、彼女の絵を観ていると、彼女が見たものや触れたもの、感じたもの……それらを、自分も画面に入っている、一瞬でもわが身に感じられる気がしたのです」

老人が語るその絵の生き生きとした描写を聞いていると、リチャードの眼前にも、その景色が浮かんでくるかのようには思えた。どこか、懐かしくすらあった。

「……その後、あなたの本はどうなったのです？」

リチャードは尋ねた。実は話を聞くうちに、この老人に最初感じた既視感の正体が、わかってきたような気がしていたのだ。おそらく自分はこの老人を、そして彼の言うその絵を知っている。

「ほどなく出版されました。もちろん、彼女の作品を装画として使用してです。それが、私と彼女がともに生きていたことの唯一の証明です。ふたりで、ひとつのものをつくったのですから」

「なんというタイトルなのですか」

『さよならマーマレイド』といいます」

やはり！ とリチャードは思った。やはり、かつて自分が手にし、そして読み耽^{ふけ}った本だったと。

「失礼ですが、あなたはもしや、アラン・ケイジさんではありませんか？」

「ええ」老人は、すこし驚いたふうに目を開いた。「そうですね……」

「その本——『さよならマーマレイド』は、私が学生の時分^{じぶん}に読んだことがあるのです」リ

チャードは、かつての記憶が鮮明に甦ってくるのを感じた。「あなたがルナリアンだったとは、ちっとも存じ上げなかった」

「ええ、出版社に斡命して、それだけは伏せてもらったのです。メディアへの露出も——たいてい機会があつたわけでもないのですが——なるべく避けていました。私の出生で注目されるのだけは嫌でしたので……」老人は懐かしそうに目を細めた。「それにしても、不思議な偶然というものはあるものだ。生涯三流作家だった私の読者とこうして出会えるとは」

「とんでもない。かつて私はあなたの書かれた作品を、ずいぶん好きこのんで読んでいたのです。そう、あるとき書店でその本を見かけたのです。それが『さよならマーマレイド』だったのですね。そして、その表紙に描かれた絵に魅かれて、すぐさまレジに並んだことを覚えています。これはきつといい作品に違いない……と。それほどまでに、印象的だったのです」

「そう言っていたら、本当に嬉しい……。どうもありがとう」老人は、瞑想するかのように何度か静かに頷いた。「彼女は、その絵のモチーフとして空をたいへん好んでいました。あるときには冗談めかして、もし生まれ変わるなら、定点観測カメラになって、ずっと空を眺めていたい」なんて言っていたこともあります。

あの事故が起きたのは、もしかすると空が、そこまで自らを愛してくれる彼女を手放しなくなかったからなのではないか——もちろん不謹慎であることは百も承知で、手前勝手にそ

う思ったこともあります。でも、もしそうなら、その気持ちはわかるのです」

それからほどなくして、タクシーのナビ・システムが目的の座標に近づいたことを短いシグナルとともに知らせてきた。その表示を注意深く見ながら、リチャードは徐々に減速し、航路の路肩にタクシーを停車させた。チカ、チカと、タクシーのハザード・ランプがオレンジ色に光る。

老人は車窓に顔を寄せて、事故のあった太平洋上空を静かに見つめていた。その奥では、夜の帳が降りた海の暗い水面が揺れていることだろう。

ひと言も発さず、ただ黙々とそちらを眺める老人の眼は、一心になにかを探し求めるようでも祈りを捧げているようでもあり、それとも、誰かに向かつてやさしく語りかけているようでもあった。

じきに、このあたりの軌道も朝を迎えるだろう。まるい水平線の向こうから太陽が姿を現し、その白くまぶしい光明で徐々に地球を青く輝く惑星へと塗り変えてゆくのだ。

もしその光景を、いま、ここで彼女がその恋人とともに眺め、そしてキャンバスに再現したとしたら、いったいどんな世界を描き出すだろうか……。老人のものの言わぬ姿をミラー越しにそっと眺めながら、リチャードは考えた。その絵はきつと美しく、そして観る者をその世界へと誘^{いざな}ってくれるに違いないのだ。